

# 〈地域〉を研究する楽しみ

第1回 9月12日 [土]

開講式 12:50~13:00

- 13:00~14:50  
「〈民族精神〉と〈郷土文学〉—〈地域研究〉と〈地域学〉の多様性と可能性」  
林 正子 (日本近代文学)
- 15:00~16:50  
「まちづくりと街なか歩き—岐阜の魅力を探るには」  
富樫幸一 (経済地理学)

第2回 9月19日 [土]

- 13:00~14:50  
「地域の風土としての里山—自然とヒトのかかわりで生まれた空間」  
肥後睦輝 (植物生態学)
- 15:00~16:50  
「岐阜の清流にすむ魚たち—DNAで解き明かす淡水魚の歴史と人為的攪乱」  
向井貴彦 (生物地理学)

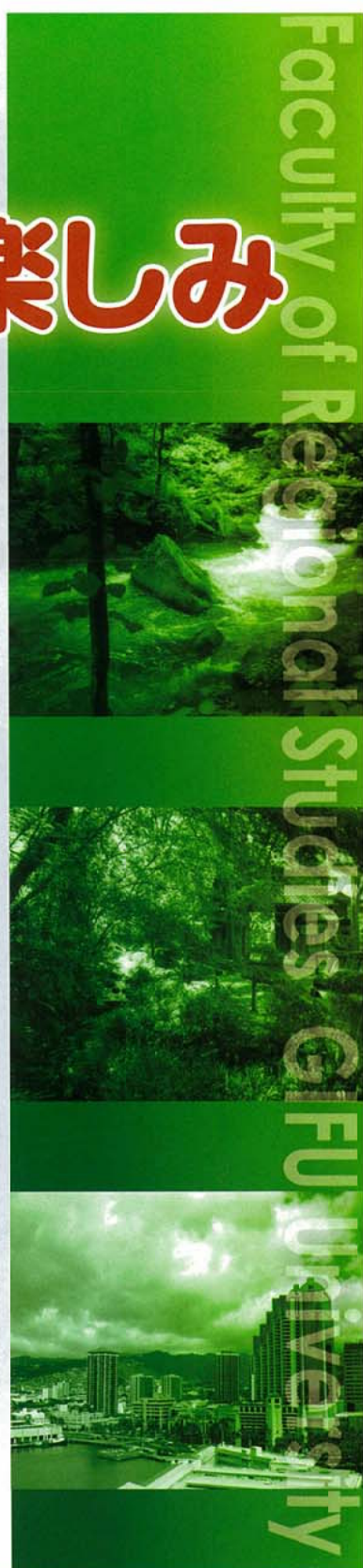
第3回 9月26日 [土]

- 13:00~14:50  
「半島マレーシアの先住民オランアスリと国家政策」  
口蔵幸雄 (生態人類学)
- 15:00~16:50  
「生存(サブシステム)の場としての地域—エコフェミニズムの問いかけ」  
三崎和志 (現代哲学)

第4回 10月3日 [土]

閉講式 16:10~

- 13:00~14:30  
「高齢者介護問題と対策を考える—介護問題を作り出す社会の仕組み」  
高木和美 (社会福祉学)
- 14:40~16:10  
「国民健康保険を考える—地域医療の保障はどうなっていくのか」  
高橋 弦 (経済・社会政策論)



- 会 場 岐阜大学地域科学部 (岐阜市柳戸1番1) 1階 地101教室
- 受講対象者 関心のある方なら、どなたでも受講できます。
- 定 員 50名 (定員を超えたときは、お断りすることがあります)
- 受講料 7,200円 (学生 6,000円) (納入後の受講料はお返しできません)
- その他 3回以上受講された方には修了証書 (岐阜大学) を授与します。

- 申込み方法 受講を希望される方は、「住所・氏名・年齢・電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により、下記へお申込みください。受講料納入方法 (銀行振込) については、お申込みいただいた後にご連絡いたします。
- 申込み期限 9月2日 (水)
- 申込み問合せ 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1  
岐阜大学地域科学部総務係  
TEL: 058-293-3003  
FAX: 058-293-3008  
E-mail: chiiki@gifu-u.ac.jp





## 第1回 9月12日(土) 開講式12:50~13:00

13:00~14:50

### 〈民族精神〉と〈郷土文学〉—〈地域研究〉と〈地域学〉の多様性と可能性

林 正子

〈地域〉は、一律的には論じ得ない、多様なイメージを喚起する概念です。しかし、ある特定の場所をあらわす地方を〈ローカル〉、それよりも広い、ある特定の空間をあらわす地域を〈リージョン〉、さらに広い地域、あるいは大きく統轄された地域ないしは相互関係をもつ広域地域を〈エリア〉というように整理することは、〈地域〉を論じる際に一定の有効性を持っていると言えるでしょう。第1回の本講義では、日本とドイツの精神史の比較研究、岐阜ゆかりの文学研究の一端を紹介し、対象・方法としての〈地域〉の多様性と可能性を論じることをめざしています。国民国家統合から帝国主義的膨張を遂げ、〈近代の超克〉を提唱し全体主義体制を構築していった、日本とドイツそれぞれの〈民族精神〉を追究する〈地域研究〉も、作家の故郷やゆかりの土地としての岐阜の風土や生活を素材とした、〈郷土文学〉研究としての〈地域学〉も、ともに〈地域〉をめぐる研究の可能性を示すものとして、本講座の水先案内となれば幸いです。

## 第2回 9月19日(土)

13:00~14:50

### 地域の風土としての里山—自然とヒトのかかわりで生まれた空間

肥後睦輝

地球環境問題から生物多様性、はては裏山のゴミ問題まで自然に関する話題が世間にあふれています。2010年にはCOP10が名古屋で開催されることになり、自然に対する意識も高まっています。でも自然とはヒトにとって、どんな価値を持つのでしょうか、いやそもそも価値などあるのでしょうか。またヒトは自然とどのようにつき合ってきたのでしょうか。こんな根本的な問題をひとりひとり考えないまま環境問題に取り組んでも、のどもと過ぎれば何とやらになりかねません。私達の最も身近にある自然といえば里山です。里山は自然とヒトのかかわり合いの中で造りだされてきた空間で、地域の風土そのものです。COP10の目玉でもある里山を手がかりに、これから我々は自然とどうつき合っていけば良いのか、今だからこそ考えてみるべきです。その手始めとして、まずは里山の成り立ち、里山の生態、里山の持つサービス機能について知っていただきたいと思います。

## 第3回 9月26日(土)

13:00~14:50

### 半島マレーシアの先住民オランアスリと国家政策

口蔵幸雄

半島マレーシアにはオランアスリと呼ばれる(政府による公的呼称)約10万人を超える先住民が暮らしています。彼らは、異なる言語、生活様式からなるさまざまな民族から構成されていますが、現在の半島マレーシアの多数派であるマレー系、中国系、インド系住民が半島に移住してくる以前からの住民の子孫であるという理由で先住民とされています。1960年代以前は、オランアスリは遠隔地の森林の中で、狩猟採集や移動焼畑農耕による自給自足的で自律的な平和で調和のとれた生活を送っていました(太平洋戦争終結後のマレー共産党の蜂起の一時期を除けば)。しかし、1960年代から国家の本格的介入が始まりました。彼らに対する、医療・教育など福利サービスの提供、「進歩・発展」のためという名目のもと、複数の集団を対象とした集団再編定住化政策を強力に進めました。また、1980年代からはイスラム教への改宗政策を推進しています。これらの政策によるオランアスリの生活の大きな変化、また政府の真の意図についてお話します。

## 第4回 10月3日(土) 開講式16:10~

13:00~14:30

### 高齢者介護問題と対策を考える—介護問題を作り出す社会の仕組み

高木和美

「介護」を要する人々の心身機能の低下・不全については、治療やリハビリ、看護を要するわけですが、高齢になり要介護状態になることが自分で問題だ、と言うわけにはいきません。

住民の生活問題の内にある介護問題は、家族の無償労働と賃金、年金、住民ボランティアを集めても賄えない、当事者と家族の健康・生活の再生産の行き詰まりの問題として捉える必要があります。自助・共助の前提として、国・自治体行政の責任と負担による、全ての住民が人たるに値する生活を営みうる基盤整備(生活問題対策)が不可欠なのです。働く意思と能力がある全ての人々に、安定雇用、人間らしい生活を送りうる労働時間と賃金が用意され、高齢者(多くは元労働者)には、住居と賃金の後払いである年金・医療・介護サービス等が落ちこぼれなく保障されなければ、生活は立ち行きません。この講義では特に、介護問題がどのように作り出されているか、また「問題対策」である日本の医療・介護政策の矛盾、社会的に自立するということについて考えます。

15:00~16:50

### まちづくりと街なか歩き—岐阜の魅力を探るには

富樫幸一

誰にとっても、自分が育った地域、暮らしてきた地域には、プラスもマイナスも含めて、本当はいろいろな思いがあったはずですが。転居や、日常の車依存の生活のため、地元のことあまり知らないで、地域における存在感が薄れていることもあるのですが、そういう時は、自分の足や自転車で見え方を回りましょう。最近も「70年、住んでたのに初めて知った」という声を、まちづくりのワークショップの中で耳にしました。地元の人から話をうかがい、地図を描き、歴史を振り返り、国内外の他の都市を訪れて、そこからまた顧みて岐阜の街を見直した時、かけがえのない長良川や金華山、古い町並の記憶が鮮明に蘇るはずですが。地域に対する思いが共有できた時、まちづくりが始まることになります。道三・信長以来の岐阜町や、柳ヶ瀬・美殿・玉宮、加納城下町と、まちあるきマップや冊子を使って、岐阜のまち歩き用の地図とおすすめの場所を紹介します。

15:00~16:50

### 岐阜の清流にすむ魚たち—DNAで解き明かす淡水魚の歴史と人為的攪乱

向井貴彦

岐阜県は豊かな自然に恵まれており、長良川などの清流が育む豊富な川魚によって鵜飼などの伝統文化が発展してきました。岐阜県の淡水魚についての様々な調査記録を整理し、最新の分類に従って調べてみると、80種が在来魚として古来より生息しており、さらに外国や国内の他地域から持ち込まれた外来魚が22種分布していることがわかりました。これらの淡水魚たちには、それぞれ種ごとに、この地に住むようになった歴史があります。また、他地域から隔離されて東海地方固有の「種」になったものもいます。近年では、野生生物のDNAを調べることで、そうした自然の歴史を詳しく知ることが出来るようになってきました。ここでは、最新の研究成果にもとづく魚たちのドラマチックな歴史と、近年の人為的な攪乱がもたらしている自然の変容について話したいと考えています。

15:00~16:50

### 生存(サブシステム)の場としての地域—エコフェミニズムの問いかけ

三崎和志

「エコフェミニズム」とはエコロジーとフェミニズムの合成語で、女性の抑圧と自然破壊のあいだに本質的なつながりがあると考え、女性と自然双方の解放を主張するフェミニズム、環境思想の一潮流を指します。そのうち、今回の講義では、世界規模での反グローバリゼーション運動に影響力を持っているインドの科学史家・運動家のヴァンダナ・シヴァ、ドイツの社会学者マリア・ミースらの議論を紹介いたします。伝統的なコミュニティでは、利潤の極大化をめざす経済ではなく、持続可能な自然との関わり方にもとづく《生存(サブシステム)の経済》が営まれてきました。おもに女性によって担われてきたこの生存(サブシステム)の営みが現在、グローバリゼーションのふるう暴力の集約点となっている、と彼女たちは告発します。彼女らの議論を、〈地域〉とはどのようなものか、今日の日本の《地域》に必要なものは何かを考える材料としたいとおもいます。

14:40~16:10

### 国民健康保険を考える—地域医療の保障はどうなっていくのか

高橋 弦

国民皆保険の象徴的存在になっているのは、国民健康保険制度であると考えられます。職業・性別等を一切問わず、だれであっても住民登録してある自治体の健康保険に加入できます。現在、国内では財政運営の難しさから、いろいろな改革論議の対象にされていますが、海外での評価は高いのです。医療機関を自由に選べるという使い勝手のよさも加わって、優れた制度として定評を得ています。しかし日本では、将来の公的医療について安心感をもっている人は、意外に少ないのではないのでしょうか。混合治療が解禁される雰囲気であったり、高齢者医療の切り離しが進んだりした結果、民間保険に入っていないと大変なことになるのでは、と知っているかたも大勢いらっしゃるでしょう。こうした流れは、「百害あって一利なし」の見本ではないのでしょうか。経済的にみれば、勤労者世帯の過剰貯蓄を推進しているだけです。貯蓄が投資に直結した高成長期の残像を払拭する時期に入っているのです。国民健康保険を例にとりながら、社会保障と経済との関連を考えて行きたいと思います。